

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Koegu People and Fish : Environmental Cognition and Acquisition

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稗田, 乃 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004252">https://doi.org/10.15021/00004252</a>

# コエグの人と魚

—環境認識の習得—

稗 田 乃\*

## Koegu People and Fish —Environmental Cognition and Acquisition—

Osamu HIEDA

The Koegu people, numbering about 300 individuals, live along the western bank of the Omo River in the extreme southwestern corner of Ethiopia. They practice flood cultivation along the banks of the river, with durra as a main crop. Hunting and gathering make a large contribution to their daily diet, and especially fishing in the river, which is a men's activity, provides a main resource for their protein supplies.

They have a culture concentrating on fishing, for instance a lot of fish songs, which are sung mostly by men, and they have a good knowledge of fishes. They categorise fishes into pairs of "brothers", which are sometimes seasonal variants of a species. Also they categorise fishes into those which live in the surface of the river and the others which live in the deeps. Their concept of "brothers" is a cultural one, which is not so directly related with the environment, while their knowledge of the habitat of fishes is directly connected with the environment. Their concept of "brothers" is acquired more highly by men than by women and the progress of the acquisition is quite slow. On the other hand the sexual difference in the acquisition of their knowledge of the habitat of fishes is relatively small and the progress of the acquisition is rather rapid.

Thus, the cultural cognition is restricted to one social category men who participate in the culture, while the cognition connected directly with the environment is held in common by all social members.

---

\* 大阪外国語大学, 国立民族学博物館共同研究員

**Key Words :** Koegu, cognition, environment, acquisition, fish  
キーワード : コエグ, 認識, 環境, 習得, 魚

I. はじめに	III. コエグの人々の魚についての認識
II. 調査地の概略	1. 魚についての認識の記述
1. クチュル村をとりまく自然環境	2. 魚についての認識の習得
2. コエグの生業の概略	IV. まとめ

## I. はじめに

筆者は、1987年から1990年にかけて、エチオピア西南部のオモ川西岸にあるクチュル村において、自らをコエグと呼ぶ人々の言語と、彼らを取りまく環境についての彼らの認識と、その習得に関する調査を行なった。この報告は、彼らの生存に重要な役割を果たしている、オモ川での魚の捕獲と、魚そのものについての認識を記述し、またその認識を彼らが如何に習得するかを述べるものである。

エチオピア西南部の最深に、トゥルカナ湖に流れこむオモ川が、その支流、マゴ川と合流する。その合流点から3 km 上流の河岸にクチュル村がある。コエグの人々の人口は、コエグ語を第一言語とするものが、約300人である。また、近隣の民族集団であるカラの人々とともに生活を行なったため、コエグ語を失い、カラ語を既に第一言語とするもの的人数が、約200人である。コエグの人々は、かつてはオモ川の河岸に数戸ずつ分散して、住んでいた。最近になって、彼らはまわりを取りまくムルンやハマルなどの強力な民族集団からの圧力に抗するために、クチュル村に集まり住むようになった。

コエグの人々は、オモ川の河岸で農耕を行なっている。その主要な作物は、モロコシである。また、河辺林での狩猟と採集も、彼らの食料生産に重要な役割を果たしている。とくに、オモ川での漁撈は、彼らのタンパク質摂取のための源として大きな役割を果たしている。また、彼らは、自らの消費と他との交換のためにハチミツを採取する。

コエグの人々は、まわりを取りまく民族集団から下位の集団とみなされている。とくに、カラの人々から様々な差別をうけている。たとえば、カラの人々はコエグの人々とは同じ容器から食事をとらない。また、カラの人々とコエグの人々の間で、婚姻関係を結ぶことは決してない。一方、同じ近隣の民族集団であっても、ブメの人々はカラの人々ほど、コエグの人々にたいして強い禁忌は持たない。近ごろは、ブメの男子は、コエグの女を娶ることを躊躇しない。なぜなら、コエグの女を娶るには、ブメ

の女を娶るほどの多くの婚資を必要としないからである。逆に、コエグの男子がブメの女を娶ることはありそうもない。なぜなら、ブメの女を娶るための婚資をコエグの男子が用意することは、不可能にちかい。ブメの男とコエグの女の間に生まれた子供は、ブメの社会で育てられ、その結果、コエグの人々はブメの社会に吸収される過程にある。最近まで、コエグの人々は、カラの人々と共生的な関係を結んでいた。カラの人々の主張によれば、コエグの人々は農地を所有せず、カラの人々から農地を借地し、耕作する。コエグの人々はその見返りに、狩猟・採集のエキスパートとして、また、ボート作りのエキスパートとして、カラのパトロンに奉仕を行なう。また、時にカラのパトロンの耕作の手伝いをする。近ごろ、コエグの人々とカラの人々の間に、農地の所有の問題に関して、紛争が生じた。その結果、コエグの人々のブメへの傾斜が強まりつつある。

コエグの人々が話すコエグ語は、ナイル・サハラ言語群の中のスルマ言語群に属する。さらにコエグ語は、スルマ言語群のなかでも、ムルンによってニィディと呼ばれる人々が話す言語と、また、ボディによってイディと呼ばれる人々が話す言語と系統的に近い関係を持っている<sup>1)</sup>。ニィディと呼ばれる人々もイディと呼ばれる人々も、クチュル村の北方、オモ川の上流の河岸に住んでいる。コエグの人々は、クチュル村の北方に彼らの言語とよく似た言語を話す人々が生存することを認識しているが、その人々がニィディと呼ばれる人々やイディと呼ばれる人々と同一である証拠はない。

さて、調査は1987年の12月から1988年の2月までと、1989年の1月から3月までと、1990年の1月から3月までの、3回に分けて行なった<sup>2)</sup>。第1回目の調査では、英語の話せるブメのアシスタントを用いて、英語とブメ語の二重の翻訳を必要としたが、第2回目の調査以降は、コエグ語のみを用いて調査を行なった。

本論は、環境と環境についての認識との間の関係を、認識の習得という観点から考察するための資料を提供することを目的としている。また、コエグの人々が持つ文化が如何なるものかを、理解するための一助となればよい。このために、コエグの人々の関心の中心にある魚について、その認識と認識の習得の有様を、資料として提示す

1) コエグ語の系統分類については、Hieda [1990] を参照。

2) 現地調査は、2度の文部省科学研究補助金（海外学術調査）を受けたプロジェクトによって可能になったものである。それぞれのテーマは、「乾燥アフリカにおける農・牧社会の比較研究—北東アフリカを中心に」と「北東アフリカにおける生業システムの比較研究—民俗モデルの構築とその適用の可能性」であり、国立民族学博物館、福井勝義助教授を研究代表者とするものである。エチオピアでは、Addis Ababa University の Institute of Ethiopian Studies の客員研究員として調査を行なった。同研究所の Dr. Taddese Beyene 所長には、調査研究上のさまざまな便宜をはかっていただいた。また、プロジェクトグループの諸先生方から、さまざまな助言をいただいた。これらの方々に謝意を表するものである。

る。

## II. 調査地の概略

### 1. クチュル村をとりまく自然環境

クチュル村はオモ川の西岸に位置する。クチュル村から 3 km ほど下流でオモ川は、その支流であるマゴ川と合流する。クチュル村は、標高およそ 500 m の低地にあり、平均気温が 28°C とかなり高い。降水量は、年間 500 mm ほどと考えられる<sup>3)</sup>。したがって、オモ川に沿って帯状に存在する河辺林を除いて、周囲の低地には半乾燥地帯が広がっている。半乾燥地域の東に岩石でできた山岳地帯があり、ハマルの人々が居住している。反対側の西は、やはり半乾燥の山岳地帯がスーダンの国境へとつづいている。乾期には、オモ川の本流とその支流のマゴ川を除いて、すべてが干上がってしまう。

### 2. コエグの生業の概略

#### (a) 農耕

コエグの人々は、オモ川の河岸堤防と氾濫原を利用して、主にモロコシを栽培している。河岸堤防での耕作と氾濫原での耕作を組み合わせることによって、一年をとおしてかなり休みなく収穫を行なうことができる。モロコシのほかには、2, 3 の種類の豆類とわずかにトウモロコシを栽培している。収穫されたモロコシは、高床の穀物倉に貯蔵される。しかし、その収穫量は彼らの消費を賄うだけ十分の量ではない。

#### (b) 牧畜

家畜に関しては、村のなかに数頭の山羊と羊が放たれ、若干の鶏が飼育されているが、彼らの生業の一部をなしていると考えするにはほどとおいものである。また、彼らの主張によれば、近隣の民族集団に飼育を委託した家畜が存在するとのことだが、その事実は確認されていない。ともあれ、村のなかで観察するかぎりにおいて、家畜が彼らの食生活に役割を果たすことはほとんどないと言える。

3) 平均気温、降水量などの資料は松田 [1988] による。松田 [1988] のもととなる資料は、クチュル村からわずかに南に位置するドゥス村での調査によって集められた。クチュル村での平均気温、降水量は、ドゥス村でのそれとほぼ同じと考えてよい。

(c) 狩猟・採集

狩猟・採集に関しては、河辺林において簡単な罟を用いたり、銃を使って野性獣を獲る。ただし、彼らは十分な銃弾を持たないし、簡単な罟によって捕獲される獲物の量は、きわめて少ない。

それに反して、河辺林での有用植物の採取は頻繁に行なわれており、しかもその有用植物の種類はきわめて多い。それら有用植物は、たいていは採取した場所ですぐ消費されるが、村に持ち帰られ、モロコシや豆類などと一緒に調理されることもある。有用植物の彼らの知識は、豊富である。

ハチミツの採取は盛んに行なわれている。彼らは、ハチミツの採取に関して、たとえば、どの花のハチミツがどのような味を持つかなど、豊富な知識を持つ。また、巣箱の制作など、ハチミツの採取に関係する技術にも豊かな知識を有する。ハチミツは、彼ら自身が消費するばかりでなく、他の民族集団との交易にも用いられる。

彼らのタンパク質摂取にもっとも重要な役割を果たしていると考えられるものは、ほぼ一年をとおしてオモ川で行なわれる漁撈である。コエグの人々は、魚について豊かな知識を持つだけでなく、文化とは呼べなくてもある種の思い入れを持っている。次の章では、彼らの魚の認識とある種の思い入れについて詳しく記述する。

コエグの生業をまとめるにあたって、注目すべきことは、第一に、牧畜は彼らの生業になら役割を果たしていない。第二に、農耕による生産は、彼らの生存を維持するのに十分ではない。しかも、その消費のやり方は、一部を穀物倉に貯蔵するとはいえ、収穫と同時に消費するとも言えるほどである。これを可能にしているのは、彼らが河岸堤防と氾濫原の両方を農耕に使用していることであるが、それ以上に、彼らの消費のやり方に関わっている。狩猟・採集によって手に入れられる食料を含めて、農耕による生産物も、手に入れたらその場で消費するという彼らの消費のやり方は、狩猟・採集民的である。第三に、彼らの生業経済は、農耕と狩猟・採集の複合経済であるが、個人が農耕と狩猟・採集を均等に行なうわけではない。個人ごとに、農耕に傾斜しているものもいれば、狩猟・採集に向かう傾向を持つものもいる。東アフリカの牧畜＝「牛文化複合」社会におけるような、社会の成員全員がある特定の文化へのめり込むこともない。

コエグの人々は、その生業と消費の形態と、狩猟・採集に関わる環境にたいする認識の豊かさから、かなり狩猟・採集民的と言える。ただし、社会の成員全員が組織的に特定の文化へのめり込んでいない。次章では、狩猟・採集のなかでもとくに漁撈に関する彼らの認識について記述する。

### Ⅲ. コエグの人々の魚についての認識

#### 1. 魚についての認識の記述

コエグの人々に魚の名前を尋ねたところ、たいした苦もなく40の魚のコエグ語による名前を、彼らはあげることができた。そこで、それら40の魚について、その色（と模様）と、体長（と体高）と、すみかと、漁期と、漁法、そして食せるか否かの、6項目に関してコエグの人々の認識を調査した。この調査の結果を表にまとめると、表1になる<sup>4)</sup>。

##### (a) 色（と模様）

コエグ語の色に関する語彙として、8語を記録することができた。それを表2にまとめると。

moola (淡い緑, 紫, 灰色), shamaja (茶色), garap (淡い茶色) のこの3語は、借用語の可能性が高い<sup>5)</sup>。これら8つの色彩語のうち、魚の色を表現するのにコエグの

4) 表1中の40の魚のうち、13種は、松田凡によって採集された標本が Addis Ababa 大学の Dr. Michael V. Mina と Dr. Yuri Yu. Djebudze と Dr. A. S. Golubtsov と Dr. Getachew Teferra によって、同定されている。

コエグ名	学名
korongwashi	<i>Hydrocynus forskali</i>
tipet	<i>Synodontis schall</i>
me'delo	<i>Schilbe mystus</i>
k'uwada	<i>Clarias gariepinus</i>
olcokol	<i>Auchenoglanis occidentalis</i>
romda	<i>Gymnarchus niloticus</i>
reeti	<i>Alestes macrolepidotus</i>
cukur'du	<i>Polypterus bichir</i>
t' u'de	<i>Schilbe niloticus</i>
kariyo	<i>Synodontis serratus</i>
junko	<i>Mormyrops sp.</i>
binnaru	<i>Bagrus docmak</i>
alzaara	<i>Bagrus bajad</i>

5) ハマル語の色彩語彙のなかに、galeb「黄色」と mora「灰色がかった茶色」が見られる [LYDALL & TORNAY 1978]。近隣に住むカラの人々の言語は、ハマル語と同系統の言語で、しかもきわめてハマル語と似ている。そこで、カラ語にもハマル語の色彩語彙と同じ語を持っていることと考えられる。コエグ語の moola「淡い緑, 紫, 灰色」と garap「濃い茶色」は、カラ語からの借用語である。ボディ語の色彩語彙のなかに、shimaji「紫色」が見られる [福井 1991]。コエグ語とボディ語は、ともにスルマ言語群に属する言語なので、これからは簡単には借用語とは決定できない。しかし、ハマル語ならびにカラ語と同系統の言語であるパンナ語に、牛の毛色の表現として shamaja が見られる [宮脇 1990]。牛を持たないコエグが牛の毛色の表現を持つとは考えられないので、コエグ語の shamaja「茶色」は借用語であるとえられる。

表1 魚の記述

魚名 (コエグ語)	色*1	体長*2	すみか*3	漁期*4	漁法*5	可/不可食*6
korongwashi	Po	7-1	Do		O	
tipet	Mo, Za	3	Da		O	
me'delo	Po	4	Do	5-12	O	
k'uwada	Di, Za	7-2	Da		O	
shiia	Ca	7-2, Ta	Da		O	
rumbia	Di	7-3	Da		O	
kishal	Ca	5	DaDa		O	
'biisho	Po	4	DaDa	12	T	
olcokol	Ca	3	Da		O	
shurmin	Po	4	Da	12	B	
shoo'do'do	Po	4	Da	12	B	
shaapon karbo	Po	3	DaDa	12	B	
araci	Po	3	Da	12	B	
guuru	Po	6	Do		O	
dowada	Po	5	Do	13-4	O	
cabada	Po	5, Ta	Do	8	T	
romda	Ca	7-2, Ta	Da		O	
ruda	Po	7-4, Ta	Da	12	T	
karuda	Po	7-2	Da		T	
loteberei	Mo	3	DaDa		T	
peresu	Po	4	Da		T	
'bogoruda	Po	5	Da		T	
kercekerce	Mo	3	Da		O	×
'daiyo	Mo	5, Ta	Da		T	
reeti	Po	2	Do	2	O	
cukur'du	Ca	6	Da		O	
t'u'de	Po	4	Do		O	
korca	Po	1	Do	12	B	
barmaca	Po	4	Do	12	T	
kankaca	Di	4	Da	4	T	
barujuguma	Po	5	Do	3, 4	O	
sheeriyo	Mo	4	Da		O	×
kariyo	Di	4	Da	4	O	
lakeshenj	Di	—	Da	4	T	×
korinja	Po	—	Do		O	
junko	Po	7-1	Da	8	O	
binnaru	Po	7-1	Da		O	
alzaara	Po	6	Da		O	
jorubui	Po	4	Da	—	—	
maasi	Po	5	Da		T	

\*1 略号は表2を参照。

\*2 数字は図1の体長を表す。Taは「大きい」を表わす。

\*3 Doは「上」を, Daは「下」を, DaDaは「下の下」を表す。

\*4 数字は表3の暦の月を表す。

\*5 Oは「釣り針」を, Tは「突く」を, Bは「搦い網」を表す。

\*6 ×を記した魚は, 不可食である。



表2 コエグの色彩語彙

色彩名 (コエグ語)	色
polceŋ (Po)	白
dimugu (Di)	黒, 濃紺
c'ac'egu (Ca)	赤
c'ogure (Co)	淡い青, 濃い緑
makale (Ma)	黄
moola (Mo)	淡い緑, 紫, 灰色
shamaja (Sh)	茶色
garap (Ga)	淡い茶色

人々によって用いられているのは、**polceŋ** (白), **dimugu** (黒), **c'ac'egu** (赤), **moola** (淡い緑, 紫, 灰色) の4語だけである<sup>6)</sup>。さらに、色ではないが、魚の模様を表現する語として、斑点の模様を意味する **zargi** がある。この「斑点の模様」**zargi** という語で表現される魚は2種類ある<sup>7)</sup>。名を記録した魚、40種類中で、「白」**polceŋ** という語で表現される魚は、25種類あった。また、「黒」**dimugu** という語と「赤」**c'ac'egu** とい

う語と「淡い緑」**moola** という語で表現される魚は、それぞれ5種類ずつ記録した。記録した魚の半数以上が、いわゆる「白」と表現された。「白」と表現された魚のなかには、彼らにとって重要な魚である **dowada** が含まれているし、「黒」と表現された魚のなかには、同じく重要な **k'uwada** が含まれている。したがって、コエグの人々の色による魚の表現には、なんらかの魚にたいする価値のようなものは含まれていない。

(b) 体長 (と体高)

コエグの人々は、長さを表現するため、言語表現のほかにも人の身体を補助的に用いる。最も短い長さを表すのは、言語表現としては **guwai** を用い、補助的に用いられる身体は、親指である。次に短い長さを表すには、言語表現としては **kumble guwai** を用い、補助的に用いられる身体は、人差し指である。これよりも少し長い長さを表す言語表現は、**kumble doci** であり、補助的に用いられる身体は、指の先から手首までである。さらにもう少し長い長さを表す言語表現は、(**kumble**) **likinei kiani** であり、それに補助的に用いられる身体は、指の先から前腕の中間部までである。それより少し長い長さを表す言語表現は、**kumble** であり、それと補助的に用いられる身体は、指の先から肘までである。さらにそれより少し長い長さを表す言語表現は、**likinei kiani guwai** であり、それに補助的に用いられる身体は、指の先から上腕の中

6) ここでのコエグ語の表記は、声調などの情報を省略し、簡略化している。言語学的な情報は、Hieda [1991] を参照。

7) ここで「種類」というのは、たんにコエグの人々が異なる魚であると認識していることを意味していて、けっして生物学的な種を意味しない。

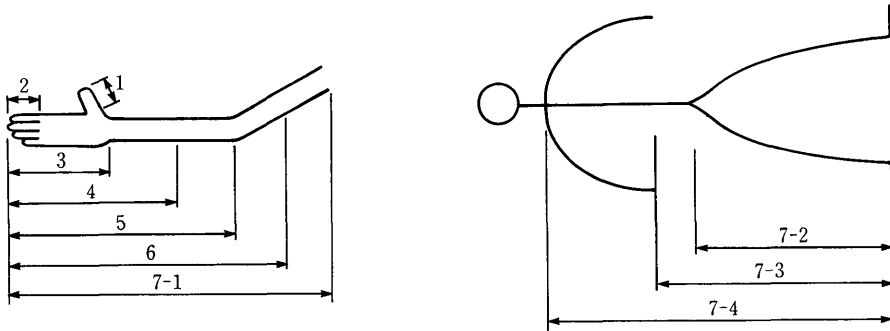


図1 魚の体長

- |                           |                        |
|---------------------------|------------------------|
| 1: guwai                  | 6: likinei kiani guwai |
| 2: kumble guwai           | 7-1: laajimi           |
| 3: kumble doci            | 7-2: laajimi           |
| 4: (kumble) likinei kiani | 7-3: laajimi           |
| 5: kumble                 | 7-4: laajimi           |

間部までである。これ以上長い長さを表す言語表現は、laajimi であり、補助的に用いられる身体によってのみ、その長さを区別することができる。その区別は、指の先から腕の付け根までの長さ、足の先から足の付け根までの長さ、足の先から腰までの長さ、足の先から首の付け根までの長さである。これら長さの言語表現と、長さを表現するために補助的に用いられる身体による表現方法を図1にまとめておく。

コエグが魚の長さ以上に関心を持つのは、魚の体高である。体高のある魚は、「大きい」tac'i と表現される。k'uwada (鯨の仲間) のような平たい魚は、「大きい」tac'i ではないと言われる。コエグの人々が「大きい」tac'i と表現した魚は、5種類を記録した。この「大きい」tac'i を表す補助的な方法は、手の平を地面と平行にかざし、地面と手の平の間隔によって体高を示す。

(c) すみか

コエグの人々は、魚のすみかを詳しく言い表さない。ただ、魚が水中の水面近くに住むか、水底近くに住むかだけを区別する。これは、彼らの魚を獲る方法と関係するからであり、魚を獲る方法と関係するかぎりの認識だけをコエグの人々は、重要視していることを意味している。彼らの魚のすみかを表す言語表現は、「上」'dooyok と、「下」daari と、「下の下」daari ke daari の3つである。そのすみかが「上」'dooyok と表現された魚は、記録した40種類中、11種類、「下」daari と表現された魚は、25種類、「下の下」daari ke daari と表現された魚は、4種類であった。

表3 コエグの暦

月	月名 (コエグ語)
1月	tajo
2月	kilkila
3月	bari (小雨)
4月	soru
5月	duka (雨期)
6月	puta (雨期)
7月	arat (雨期)
8月	warin (雨期)
9月	labanjamula
10月	mura
11月	meeko
12月	sholu (小雨)
13月	karkalo

(d) 漁期

コエグの人々は、1年を13ヵ月に分割している。それは、一種の太陰暦のようであるが、降雨との関係を含めてまとめると、コエグの13ヵ月は、表3になる。ちなみに、調査を行っていた1989年、2月1日は、「3月」bariに属していた。

記録した魚、40種類中の8種類が「12月」sholuのみをその漁期としている。「4月」soruのみを漁期とするのは、3種類ある。「8月」warinのみを漁期とするのは、2種類ある。「2月」kilkilaのみを漁期とするもの、「3月」bariから「4月」soruを漁期とするもの、「5月」dukaから「12月」sholuまでを漁期とするもの、「13月」karkaloから

「4月」soruまでを漁期とするものが、それぞれ1種類ずつ記録した。これら以外の魚は、いつでも1年を通じて漁をするとコエグの人々は答えた。これら漁期がはっきりしない魚を除くと、「12月」のみを漁期とする魚が8種類存在しているのが、若干、目立つ事実である。これら8種類の魚のなかで、5種類は掬い網 (beete) によって、3種類は突いて捕獲される。これら8種類のなかには、釣り針によって捕獲される魚は、記録されない。逆に、掬い網 (beete) による漁は、ただ「12月」のみ行なわれる。この事実は、漁期と漁法がある程度、関係していることを示している。

コエグの人々は、オモ川の水位の増減だけではなく、水の清濁に大きな関心を払う。水が澄むことを、「水が黒くなる」*mua dimaa* と、水が濁ることを、「水が赤くなる」*mua c'ac'aa* と表現する。水の清濁により、漁が不可能になる魚が存在する。たとえば、コエグの人々にとって重要な魚である *dowada* は、水が濁ると漁を行なうことができない。それは、漁法に関係している。*dowada* の漁法は、水面に撒餌を撒き、魚を集めて、集めた魚のなかに釣り針を投げ入れるというやり方である。この漁法では、水が濁ると撒餌で魚を水面に集めることも、とくに、集めた魚を目視することができない。

水の清濁は、もちろん降雨と関係している。雨期に、コエグの居住地に降雨がなくても、上流で降雨があれば、川の水は濁るのである。コエグの人々が漁期があると答

えた17種類の魚のなかで、おおざっぱに言って、水の澄む季節である「13月」から「4月」までを漁期とする魚は、6種類を記録し、水の濁る季節である「5月」から「12月」までを漁期とする魚は、11種類を記録した。

コエグの人々が認識する漁期は、あくまでも漁法と関係しており、魚の生態とは全く関係していない。聞きとりによれば、コエグの人々は、魚は1年を通じていつでも繁殖し、また、1年を通じていつでも成長し、大きくなると考えている。もちろん魚の生態と漁法が、全く関係がないわけではないので、コエグの人々の魚そのものについての認識が、魚の生態についての認識を全く欠いているわけではない。ただし、それは漁法と結びついているかぎりにおいて、コエグの人々の魚についての認識は、魚についての生態的な認識を包含する。

#### (e) 漁法

コエグの人々の魚の獲る方法は、3つある。第1は、釣り針 (oko) で釣る方法、第2に、掬い網 (beete) で掬う方法、第3に、突い (atokiyaa, 1. sg.) で獲る方法である。

聞きとりによれば、コエグの人々の本来の魚の獲り方は、第3の突いて獲る方法である。使う道具は、槍や槍の金属でできた石突きである。過去では、ただ単に自然の木をその先を尖らせて利用したという。また、槍をそのまま突いたり、投げたりするだけでなく、槍にロープをくくりつけて投げることもある。また、この漁法は川の本流で行なわれるばかりでなく、氾濫した水でできたプールが乾期になって干上がり、小さくなったところでも行なわれる。

釣り針は、最近になって持ち込まれたようである。ただし、釣り針 (oko) など、釣り針で釣る方法に関係する語彙の来源は、明らかではない。

掬い網で魚を掬うやり方も、コエグの人々の本来の漁法ではないと考えられる。掬い網 (beete) は、近隣のブメ語からの借用語である<sup>8)</sup>。掬い網は、木と木の蔓から、毎年、「13月」karkalo に新しく作られる。掬い網を持った人が、丸木のくり舟の舳先に立ち魚を掬うこともある。

調査した40種類中、突いて獲ると答えたのは12種類あり、釣り針で釣ると答えたのは22種類、掬い網で掬うと答えたのは5種類、不明が1種類であった。釣り針で釣ると答えた魚、dowada を突いて捕らえようとしている場面を実際、目撃したことがあ

8) コエグ語の beete 「掬い網」は、近隣のブメ語からの借用語であると考えられる。なぜなら、ブメ語と同系統で、しかもきわめてよく似た言語であるトゥルカナ語に、epute 「網」が見られる [Best 1983]。

る。ゆえに、コエグの人々がある魚を獲るとき、けっしてただ1つの方法のみを用いるわけではない。また、'biisho と呼ばれる魚のように、口が小さくて釣り針にはかからないと彼らが、聞きとり中にわざわざコメントした魚もある。

これらの3つの漁法のほかに、釣り針を水のなかにしかけておく方法がある。このしかけは、野性動物を捕獲するための罟 (nyauno) と同じ単語で呼ばれる。この語もブメ語からの借用語である<sup>9)</sup>。この漁法は、釣り針で釣る方法と独立した漁法ではない。

漁期のところでも述べたように、掬い網で掬うと答えた魚は、すべてその漁期は、「12月」にかざられている。また、突いて獲ると答えた魚12種類中、10種類は、そのすみかが「下」daari, あるいは、「下の下」daari ke daari となっている。

コエグの人々の魚についての認識は、魚のすみかについても、漁期についても、漁法についての認識と関係していると言える。

(f) 魚の評価

コエグの人々の魚にたいする評価については、とくに注意を払うべきものはない。コエグの人々は、魚をすべて美味であると答える。魚を評価するにあたって、味はなんらその評価基準とはならない。ただし、記録した40種類のなかで、食べる と吐くから食べないと答えた魚が3種類あった。この3種類のうち、kercekerce は年長者は食べるが、若い世代は食べないと言う。また、この魚は手足で歩くと、コエグの人々は言い、それはハゼの一種を想像させる。その姿が、若い世代が食べないことと関連があるかもしれない。

次に、コエグの人々に好きな魚をむりやり1人、1種類だけ答えさせた。その結果が、表4である。

先に述べたように、コエグの人々は魚をその食味で評価しているわけではないので、表4はただ単に、これらの魚のコエグの人々にたいする身近

表4 魚の好み

魚名 (コエグ語)	人数
1. dowada	8
2. tipet	5
3. k'uwada	4
3. 'biisho	4
5. cabada	3
6. guuru	2
6. alzaara	2
6. me'delo	2
10. korongwashi	1
10. karuda	1
10. kishal	1
10. junko	1
10. korinja	1
10. rumbia	1
10. shiia	1

9) コエグ語の nyauno 「罟」は、ブメ語からの借用語である。なぜなら、ブメ語と同系統で、しかもきわめてよく似た言語であるトゥルカナ語に、nyauno 「罟」が見られる [OHTA 1989]。

さの度合いを示していると考えられる。

(g) その他

コエグの人々の魚についての認識のなかで、「兄弟」*cene* というものがある。これは、ある特定の魚を特定の魚と結びつけて、「兄弟」とコエグの人々は認識する。彼らによって結びつけられた魚は、いつでもそうとはかぎらないが、あるときは、同じ種の魚の季節的な変態と考えられる<sup>10)</sup>。この魚の「兄弟」というコエグの人々の認識については、次の章で詳しく検討する。

また、「子供」*hanta* という認識がある。これは、成長魚とも比例できるものであり、成長するにしたがって名前を変える魚が存在する。成長魚とも比例できる魚は、*k'uwada*, *korongwashi*, *junko* の3種類を記録した。*k'uwada* は、人間の指の半分程度の大きさのとき *worca* と、人間の指程度の大きさのとき *kankaca* と、指の先から前腕部の中間あたりまでの大きさのとき *purundo* と、呼ばれる。また、*korongwashi* と *junko* の成長する以前は、それぞれ *mudawakooriyo* と *momodo* と呼ばれる。これら3種類以外の魚は、すべてその成長する以前は、それぞれの「子供」*hanta* と呼ばれる。たとえば、*dowada* は成長する以前は、*dowada* の「子供」*hanta ka dowada* と呼ばれる。

逆に、特別に大きな個体に愛称とも言えるような名前を持つ魚を4種類、記録した。*dowada* と、*k'uwada* と、*guuru* と、*cabada* の特別に大きな個体は、それぞれ *sabo*, *unguna*, *habor*, *turbula* と呼ばれる。

また、「(様々な鳴声で魚が) 鳴く」と意味する3つの語を記録した。たとえば、*k'uwada* が鳴くのは、*dinakaa* (3. sg.) 「鳴く」と表現され、*tipet* が鳴くのは、*guumaa* (3. sg.) 「低い声でうなる」と、また、*okoraa* (3. sg.) 「高い声で鳴く」と表現される。ただし、これらの動詞は、魚が鳴く場合に限定された動詞表現ではなく、一般に動物が鳴く場合にも用いられる。

この章では、コエグの人々が持っている魚についての認識を記述した。これらのほかに、コエグの人々は、魚をテーマにした歌を多く持っている。このことからコエグの人々が魚にたいして、なんらかの思い入れを持っていることは疑いない。次節では、とくに魚の「兄弟」というコエグの人々の認識について、詳しく検討する。また、コエグの人々によって魚の「兄弟」という認識がどのようにして習得されるかを検討する。それと対照するために、魚のすみかについての認識が、コエグの人々によって

10) ここでいう「種」とは、生物学的な種を意味している。

どのように習得されるかも見る。

## 2. 魚についての認識の習得

前節で見たように、コエグの人々は、魚にたいしてなんらかの思い入れを持ち、また、魚についてかなり豊かな認識を持つ。その認識は、魚のすみかや漁期といった食料としての魚を獲ることに直接結びついた認識のみならず、魚を獲ることとは直接結びつかない認識をも含んでいる。魚を獲ることとは直接結びつかない認識には、魚の「兄弟」や魚の「子供」の認識などがある。この節では、それらの認識がコエグの人々によって、どのように習得されるかを検討する。まず、魚を獲ることとは直接結びつかない認識の習得を検討するにあたって、魚の「兄弟」の認識をコエグの人々がどのように習得するかを見る。それと対照するために、魚を獲ることと直接結びついているであろう、魚のすみかについての認識の習得について検討する。

### (a) 魚の「兄弟」

コエグの人々の魚についての認識のなかで、「兄弟」cene というものがある。コエグの人々は、ある特定の魚をある特定の魚に関係づけて認識し、それを「兄弟」cene と呼ぶ。かれらによって「兄弟」と結びつけられた魚は、必ずしもいつもとは言えないが、生物学的に同種の魚の季節的変態と考えられる。コエグの人々によって「兄弟」であると結びつけられた魚は、15の対を記録した。コエグの人々がその「兄弟」はいないとした魚は、14種類が存在した。

弁別特徴の記述は、コエグの人々が、「兄弟」として対になっている魚を見分ける際に、目印としている特徴である。それらは、大きく分けて、2つの特徴にまとめられる。1つは、体の色、とくに鱗の色であり、もう1つは、体の相対的な大きさである。すべての魚を実際に観察したわけではないが、たまたま観察できた「兄弟」としてコエグの人々によって対とされている dowada と barujukuma は、確かに、コエグの人々が言うように、dowada の鱗が白く、barujukuma の鱗が赤いことが確認できた。

コエグの人々が持つ魚の「兄弟」という認識は、かなり安定したものである。なぜなら、コエグの人々が「Aの兄弟はBである」と答えるとき、その逆を尋ねると間違いなく、「Bの兄弟はAである」と答える。具体的には、この知識を調査するにあたって、無作為に表1の順に、「Xの兄弟は何ですか」という質問を繰り返した。その答えとして、「Xの兄弟はYである」がかえってくる。これを表1の順に繰り返す

表5 魚の「兄弟」

「兄弟」の対		弁別特徴
dowada	barujuguma	dowada は鱭が白く, barujugma は鱭が赤い。
korongwashi	none	
tipet	kercekerce	tipet は, 鱭が黒い。
me'delo	t'u'de	me'delo は腹が白く, t'u'de は腹が赤い。
k'uwada	none	
shiia	rumbia	shiia は鱭が赤く, rumbia は鱭が黒い。
kishal	none	
'biisho	araci	'biisho は体が大きく, araci は体が小さい。
olcokol	sheeriyo	olcokol は鱭が赤く, sheeriyo は鱭が黒い。
shurmin	jorbui	shurmin は体が小さく, jorbui は体が大きい。
shoo'do'do	shaapon karbo	shoo'do'do は体が大きく, shaapon karbo は体が小さい。
guuru	cabada	guuru は体が大きく, cabada は体が小さい。
romda	junko	romda は体が大きく, junko は体が小さい。
ruda	none	
karuda	peresu	karuda は体が大きく, peresu は体が小さい。
loteberei	none	
peresu	'boporuda	
'daiyo	none	
reeti	korca	reeti は鱭が赤く, korca は鱭が白い。
cukur'du	none	
barmaca	none	
kankaca	none	
sheeriyo	none	
kariyo	none	
lakeshej	none	
korinja	none	
binnaru	alzaara	binnaru は体が黒っぽく, alzaara は体が白っぽい。
jorbui	none	
maasi	korinja	

と、いつかは、Yを主語にして、「Yの兄弟は何ですか」と質問することが生じる。この時、コエグの人々は、間違いなく「Yの兄弟はXである」と答えた。ただし、「兄弟」の対が一致しないことがある。たとえば、olcokolとshurminの「兄弟」は、それぞれ、sheeriyoとjorbuiであると答えながら、一方、sheeriyoとjorbuiの「兄弟」はいないと答えた。また、karudaの「兄弟」はperesuであると答えながら、peresuの「兄弟」は'boporudaであると答えた。この点をつっこんで聞くと、karudaとperesuと'boporudaは互いに「兄弟」であると答えた。このように「兄弟」の対が



一致しないのは、この3例のみであった。この事実は、「兄弟」についてのコエグの人々の認識は、かなり安定していることを示している。

この魚の「兄弟」という認識が興味深いのは、魚の「子供」に特別な名前を持つのは3種類しか存在しないのた

表6 魚の「兄弟」質問表

1. dowada	barujunguma
2. korongwashi	none
3. tipet	kercekerce
4. me'delo	t'u'de
5. k'uwada	none
6. shiia	rumbia
7. kishal	none
8. 'biisho	araci
9. rumbia	shiia
10. olcokol	sheeriyo
11. shurmin	jorbui
12. shoo'do'do	shaapon karbo
13. guuru	cabada
14. araci	none, 'biisho
15. shaapon karbo	shoo'do'do
16. cabada	guuru
17. romda	junko
18. ruda	none
19. karuda	peresu
20. loteberei	none
21. peresu	karuda, 'bogoruda
22. reeti	korca
23. 'daiyo	none
24. cukur'du	none
25. t'u'de	me'delo
26. korca	reeti
27. barmaca	none
28. kankaca	none
29. barujunguma	dowada
30. sheeriyo	none, olcokol
31. kariyo	none
32. lakeshej	none
33. korinja	none
34. junko	romda
35. binnaru	alzaara
36. jorbui	romda
37. maasi	korinja

いて、15対の魚の「兄弟」が存在することである。魚の文化の一例として、日本人が成長魚のように魚の成長段階を分類し、関係づけるのにたいして、コエグの人々は、「兄弟」のように魚の季節的変態を分類し、関係づけて認識する。日本人の成長魚にあたるのは、コエグでは魚の「子供」であり、魚の「子供」に特別な名前を持つのは3種類しか存在しない。このことから、コエグの人々は、魚の成長段階にはさほど注意を払わないことを意味している。

魚の「兄弟」を調査するにあたっては、1人のインフォーマントを用いたのではなく、複数のインフォーマントを同時に用いて、彼らの間で権威ある答えを聞きとった。彼らの間で意見の不一致は、ほとんど観察されなかった。このように表5は、コエグの人々の権威ある答えである。

次に、この魚の「兄弟」の認識を、コエグの人々はどのように習得するのであろうか。この

表7 魚の「兄弟」正解率

インフォーマント	年齢 性	3才	4才	5才	7才	7才	10才	10才	10才	10才	15才	15才	16才	18才	18才	21才	30才
		M1	M2	M3	M4	M5	M6	M7	M8	M9	M10	M11	M12	M13	M14	M15	M16
正解率 (%)		0	0	0	0	0	5	56	27	59	0	40	56	51	83	70	56

インフォーマント	年齢 性	6才	10才	10才	11才	15才
		F1	F2	F3	F4	F5
正解率 (%)		0	0	2	2	0

M: 男 F: 女

認識の習得のやり方に、彼らの環境にたいする態度が、なんらかの影響を与えてはいないだろうか。これを調べるために、キャンプにやってきた人間、とくに子供をつかまえて、質問を行なった。表6は、用いた質問表であり、その結果をまとめたものが表7である。

表6の左側の魚を主語にして、「Xの兄弟は何ですか」と質問を行なった。その質問にたいする正しいと思われる答えが、この表の右側の魚である。表6における魚の順序は、無作為にならべた。ただし、魚の「兄弟」として対になる魚は、互いにはなれるように配置した。14, 21, 30の質問の正解は、複数個存在するが、コエグのインフォーマントがそのどちらで答えようと、正しく答えたとみなした。「Xの兄弟は何ですか」との質問に、コエグのインフォーマントが正しく答えたか、間違っただけかを表にしたのが、表7である。3才から30才までの男子16人と、6才から15才までの女子5人にたいする調査の結果である。年齢は、推定年齢である。年齢の推定のやり方は、たとえば毎年と言ってよいほど規則的に生まれ、生き残っている兄弟達を基準にし、コエグの「エイジ・グループ」haaria という概念を利用し、あるインフォーマントが基準の兄弟達の1人と同じ「エイジ・グループ」ならば、そのインフォーマントの年齢は、基準の兄弟と同じ年齢であると推定した<sup>11)</sup>。

表7から考えられることは、魚の「兄弟」についての認識に関して、男女差が極めて大きいことである。女子5人中、2名のみが、表6の1番の質問だけに正しく答えることができた。このことは、魚の漁が男性の活動であって、女性はめったに魚の漁を行なわないことと関係している。聞きとりによれば、女性はたまに遊びとして魚を獲ることはあるが、それも極めて稀である。環境の認識には、性差が存在すると言える。ただし、環境の認識といってもこの魚の「兄弟」の認識は、直接的な環境の認識

11) コエグ語の haaria「エイジ・グループ」は、カラ語からの借用語と考えられる。

ではなく、かなり高度で、しかも文化的と言ってもよい環境の認識と言える。このような環境の認識には、生業活動として漁撈に携わっている男性が、より大きく関与している。逆に、生業活動として漁撈に携わらない女性は、このような環境の認識に深く関与していないと言える。

次に、年齢差に関して考察すれば、この魚の「兄弟」の認識の習得は、10代後半になってかなり高くなる。この認識の習得がかなり遅いことは、特徴的である。言語の発達では、生後12ヵ月で同音の連続からなる単語を話し始め、24ヵ月で50項目以上の語彙を獲得し、3年で1000語程度の語彙を持つようになり、4年でほぼ言語が確立すると言われている<sup>12)</sup>。魚の「兄弟」という、環境の分類と関係づけを含む高度な認識の習得を、言語の習得と比較することはできないだろう。福井は、エチオピア西南部に住み、コエグと同じスルマ系言語を話すボディの人々の色彩認識を調査している。それによると、ボディの人々の色彩認識は、10才以下ですでに十分発達し、安定している<sup>13)</sup>。ところが、ボディの人々は、微妙な色を表現するやり方として、2個の色彩基本語からなる複合語を用いるが、この複合語の使用頻度は、年齢が高くなるにつれて高くなる。福井は、それを表にしている<sup>14)</sup>。

ボディの人々は、色彩基本語を10才で十分に獲得するが、複合語で色彩をより細かく表現するやり方を獲得するにはもっと時間を要することが分かる。

コエグの人々の魚の「兄弟」という認識の習得は、単に魚の名前を憶えるというレベルのものではない。魚を認識し、その名前を憶えることは、ボディの色彩基本語の獲得に比例し、魚の「兄弟」の認識を習得することは、ボディの複合語で色彩をより細かく表現するやり方を獲得することと比べることができるであろう。コエグの人々が、15才以上になって魚の「兄弟」の認識を習得するとしても、それは、環境認識の習得がかならずしも遅いとは言えない。言語の獲得とは違

表8 ボディの色彩複合語の出現頻度

インフォーマント 年令 複合語出現頻度 (%)	男		
	5~10	11~19	20以上
	0.8	7.1	24.5

インフォーマント 年令 複合語出現頻度 (%)	女		
	8~10	11~19	20以上
	2.4	5.9	8.5

12) レネバーグ [1974] の第4章を参照。

13) 福井 [1991: 72] を参照。

14) 福井 [1991: 75] を参照。

い、どのレベルの環境認識が、どの年令で獲得されるかは明らかではない。またどの環境認識が、どのレベルに属するのか明らかではない。

年令差に関するかぎり、コエグの人々は、10才位から魚の「兄弟」の認識を習得し始め、15才以上になってある程度その認識は、安定すると言える。ただし、それはある程度の安定度であって、認識の度合いには個人によるばらつきが観察できる。

比較的高い正解率を示した M7 から M16 までの10人に関して、表4のコエグの人々に好まれている魚だけを取り出して、正解率を計算すると、表9になる。

M7 から M16 までの10人の、表6の質問の37項目それぞれの正解率を平均すると、50.2%という値になった。この平均値とコエグの人々に好まれている魚についての正解率を比べてみると、好まれている魚についての正解率は、さほど際立って高くはない。最も好まれている dowada について、やっと80%の正解率を示しているだけである。これについて、2つのことが考えられる。第1は、コエグの人々が魚の食味にたいしてなら基準を持たないことから、表4がコエグの人々のそれぞれの魚にたいする親近度を示していると考えられるが、しかし、表4は、それをかならずしも正確に反映していない。表4のもととなった調査の行なわれた季節も考慮しなくてはならないであろう。調査が行なわれたときは、dowada の漁期の最盛期であった。それゆえ、コエグの人々の関心がこの魚にあって、それが、表4に反映したとも考えられる。第2に、dowada についての正解率は、若干他のものより高くはなっているし、表9のコエグの人々が好むとした魚についての正解率も多くは、平均値より高くなっている。コエグの人々が親近感を持つ魚について、少々正解率が高くなっているとはいえ、それを証明するほど、コエグの人々の魚への親近感の程度と正解率の間には相関はない。このことは、魚の「兄弟」の認識が環境の分類と関係づけを含む高度なものであることからくる。

表9 魚の好みと正解率

魚名 (コエグ語)	正解率
1. dowada	80%
2. tipet	60%
3. k'uwada	40%
3. 'biisho	0% (80%) <sup>15)</sup>
5. cabada	70%
6. romda	60%
6. guuru	70%
6. alzaara	40%
6. me'delo	60%
全体の平均	50.2%

15) 'biisho の魚の「兄弟」正解率は、0%であるが、'biisho の「兄弟」である araci で正解率を計算すれば、80%という数字になる。

表10 魚のすみか, 質問表

魚名 (コエグ語)	すみか
1. korongwashi	Do
2. tipet	Da
3. me'delo	Do/Da
4. k'uwada	Da
5. shiia	Da
6. rumbia	Da
7. kishal	Da
8. 'biisho	Da
9. olcokol	Da
10. shurmin	Da
11. shoo'do'do	Da
12. shaapon karbo	Da
13. araci	Da
14. guuru	Do
15. dowada	Do
16. cabada	Do
17. romda	Da
18. ruda	Da
19. karuda	Da
20. loteberei	Da
21. peresu	Da
22. 'bogoruda	Da
23. kercekerce	Da
24. 'daiyo	Da
25. reeti	Do
26. cukur' du	Da
27. t'u'de	Do
28. barmaca	Do
29. kankaca	Da
30. barujuguma	Do
31. sheeriyo	Da
32. kariyo	Da
33. lakeshej	Da
34. korinja	Do
35. junko	Da
36. binnaru	Da
37. alzaara	Da
38. jorubui	Da
39. maasi	Da

(b) 魚のすみか

魚を獲ることと、直接とは言えずとも密接に結びついていると考えられる、魚のすみかについての認識を、コエグの人々は、どのように習得するのであろうか。これを調査するために、魚の「兄弟」の認識について調査した時と同様に、キャンプに来る人間、とくに子供をインフォーマントにして質問を行なった。表10は、その質問表であり、表11が、調査の結果をまとめたものである。

表1では、魚のすみかを「上」'dooyok, 「下」daari, 「下の下」daari ke daari の3つに分類した。この質問表では、「下」と「下の下」を区別せずに、ともに「下」として処理した。また、me'delo に関しては、そのすみかを決定する際、インフォーマントによってそのすみかを「上」とも「下」とも答えたため、正解をそのどちらか一方に定めることができなかった。質問の「Xの魚は、上をうろついていますか、下をうろついていますか」にたいする答えが、表10に記載した答えに該当すれば、その答えは正解とした。正解率をまとめたのが、表11である。

インフォーマントに与えられた番号で、表11と表7に共通する番号は、2つの調査において同一のインフォーマントであることを示している。年齢は、

表11 魚のすみか、正解率

インフォーマント	年令性	5才	7才	7才	10才	10才	10才	15才	16才	18才
		M3	M4	M5	M6	M7	M8	M10	M12	M14
正解率 (%)		2	0	87	74	87	74	92	92	97

インフォーマント	年令性	6才	10才
		F1	F2
正解率 (%)		0	46

M: 男 F: 女

前節で述べた手法による推定年令である。また、質問は二者択一の形式であるから、すべての質問にたいして「上」あるいは「下」と同一の答えをした場合、それは不正解とみなした。

表11から考えられることは、魚のすみかについての認識に関して、男女差が魚の「兄弟」についての認識における男女差ほど大きくはないことである。魚の「兄弟」に関しては、女性は、ほとんどすべての質問に正しく答えることができなかった。一方、魚のすみかに関する調査では、F2の女性が、ほぼ半数近い正解を答えた。上でも指摘したように、この調査は二者択一の質問からなるので、偶然でも正解率は50%になる。しかし、調査者の観察によれば、この女性は全くでたらめに答えたという印象はない。

魚の漁は男性の活動であって、女性はめったに魚の漁を行なわない。このことが、女性の魚のすみかについての認識を希薄なものにしている。ただし、魚のすみかといった環境と比較的直接的に結びついた認識は、ある程度女性にも習得される。一方、魚の「兄弟」といった環境と直接結びつかない認識は、魚の漁を行ない、魚になんらかの思い入れを持つ男性だけが習得する。

次に、年令差に関して考察すれば、この魚のすみかの認識は、10才以下ですでに十分発達し、安定している。このことは、前節で引用したボディの人々の色彩認識の発達と比較できる。ボディの人々の色彩認識は、10才以下ですでに十分発達し、安定している。魚の「兄弟」の認識を習得することは、ボディの複合語で色彩をより細かく表現するやり方を獲得することと比べることができるのにたいして、魚のすみかの認識の習得は、ボディの色彩基本語の習得に比例する。

比較的高い正解率を示した M5 から M14 までの7人に関して、表4のコエグの人

表12 魚の好みと魚のすみか正解率

魚名 (コエグ語)	正解率
1. dowada	100%
2. tipet	100%
3. k'uwada	85%
3. 'biisho	100%
5. cabada	100%
6. romda	71%
6. guuru	100%
6. alzaara	85%
6. me'delo	85%
全体の平均	86.4%

高い正解率を示している。魚のすみかという環境と比較的結びつきについている認識に関しては、コエグの人々の魚にたいする親近感の程度と認識の習得の間には相関がある。

#### IV. ま と め

この報告では、エチオピア西南部に住むコエグの人々の魚についての認識とその認識の習得に関して、調査にもとづいて紹介した。そこで分かったことは、環境の認識と生業は関係するとはいえ、環境の認識と生業の間に直接的な関係を考えることはできないことである。

コエグの人々は、主として男性のみが魚の漁に従事する。魚の「兄弟」についての認識がもっぱら男性に限られていることは、環境の認識と生業の間に直接的な関係を想定することになるかもしれない。しかし、一方、魚のすみかについての認識は、男性だけに限らない。女性もある程度、魚のすみかについての認識を持つ。しかも、魚のすみかの認識は、魚の漁法と結びつきしている。いま、もしも環境の認識と生業の間に直接的な関係が存在するなら、魚の漁を行なわない女性は、魚のすみかについての認識を持たないはずである。

環境と直接結びつきしている認識から、環境の分類と関係づけを含む、環境から隔たった認識まで、さまざまなレベルの認識が存在する。魚のすみかについての認識は、

々に好まれている魚だけを取り出して、正解率を計算すると、表12になる。

M5 から M14 までの7人の、表11の質問の39項目それぞれの正解率を平均すると、86.4%という値になった。この平均値とコエグの人々に好まれている魚についての正解率を比べてみると、好まれている魚についての正解率は、総じて平均値よりも高くなっている。表4が、ある程度コエグの人々の個々の魚にたいする親近感の度合いを反映していると考えられるので、親近感の度合いが高い魚ほど、高い正解率を示していなければならない。実際、表12では、上位を占める魚ほど、

環境と直接結びついた認識と考えられ、魚の「兄弟」についての認識は、環境から隔たった認識と考えられる。環境に直接結びついた認識の習得は、かなり早い時期に発達し、安定する。男女差もさほど大きくはない。このことは、魚のすみかについての知識の習得が明らかにする。環境の分類と関係づけを含む、環境から隔たった認識の習得は、その習得の時期が遅く、その認識を共有する社会成員に限りがある。このことは、魚の「兄弟」についての認識の習得が明らかにする。魚の「兄弟」の認識は、かなり高度で、しかも文化的と言ってもよい環境の認識である。このような環境の認識には、生業活動として漁撈に携わっているばかりでなく、漁撈を文化として保持する男性がより大きく関与する。魚に関する文化が男性のものであることを示す例として、魚を歌った歌がある。コエグの人々は、魚を歌った歌を多く持っている。そして、その多くが男性によって歌われるのである。ここで男女間で観察されるような、社会成員間での環境にたいする認識の差は、認識の習得の過程で生じると考えられる。環境そのものと環境の認識との間の関係は、認識の習得の過程と切り離して考えることはできないのである。

## 文 献

### 安溪遊地

1982 「ザイール川とタンガニカ湖漁撈民の魚類認知の体系」『アフリカ研究』21: 1-56。

### BEST, Gunter

1983 *Culture and Language of the Turkana*. Carl Winter Universitätsverlag.

### 福井勝義

1991 『認識と文化、色と模様民族誌』(認知科学選書21) 東京大学出版会。

### HIEDA, Osamu

1990 KOEGU, a preliminary report. *Journal of Swahili and African Studies* 1: 97-108.

1991 *Koegu Vocabulary, with a reference to Kara*. (African Study Monographs, Suppl. 14), The Center for African Area Studies, Kyoto University.

### レネバーク, E. H.

1974 『言語の生物学的基礎』佐藤方哉・神尾昭雄訳 大修館書店。

### LYDALL, Jean & Serge TORNAY

1978 *Suivi de note sur les noms de couleur hamar*. In Serge Tornay (ed.), *Voir et nommer les couleurs*, Nanterre: Laboratoire d'ethnologie et sociologie comparative, Université de Paris X, pp. 576-580.

### 松田 凡

1988 「オモ川下流低地の河岸堤防農耕—エチオピア西南部カロの集約的農法—」『アフリカ研究』32: 45-67。

### 宮脇幸生

1990 「生業の変遷と色彩語彙の変化——エチオピア西南部クシ系農牧民ツァマイの色彩語彙についての予備調査——」『スワヒリ&アフリカ研究』1: 146-175。

### OHTA, Itaru

1989 *A Classified Vocabulary of Turkana in northwestern Kenya*. (African Study Monographs, Suppl. 10), The Center for African Area Studies, Kyoto University.